

# フッサールの實在論的転回

堀 栄造

現象学の祖エドムント・フッサールは、中期の主著『イデーニ I』(1913年)を公刊したあと、引き続き、死後出版された『イデーニ II』(1912年から1918年へかけて執筆された草稿)に取り組んだ。しかし、そこには、『イデーニ I』は観念論的傾向をもつものに対して『イデーニ II』は實在論的傾向を帯びるという「實在論的転回」が見られる。なぜそのような事が起きたのか。これまで、この問題は、不問に付されていた。

そこで、本論は、その当時のフッサールとその弟子たちとの関係をさまざまな角度から照射し、「フッサールの實在論的転回」に関するフッサールを取り巻く弟子たちの思想的状況や思想的影響関係および實在論的転回の思想的核心を明らかにしようとするものである。

## (1) フッサールの現象学的観念論

フッサールは、『イデーニ I』(1913年)の「あとがき」で、伝統的な實在論と観念論の闘争を踏まえつつ自己の立場を両者から区別して現象学的観念論と称し、以下のように述べている。

「今や、しかしまた、實在論によってその排斥すべき敵対者として闘われる観念論に対して超越論的現象学的観念論を根本本質的に区別することをはっきりと明らかにすることは、必要である。とりわけ、現象学的観念論は、実在的世界が一つの仮象であって自然的思考や実証科学的思考はたとえ気づかぬにせよそうした仮象の下に服しているというふうにあたかも現象学的観念論が考えるかのように、実在的世界の(さしあたり自然の)現実的存在を否定するのではない。現象学的観念論の唯一の課題と作業は、この世界の意味を解明することであり、それにおいてこの世界が各人にとって現実的に存在するものとして妥当し現実的な権利を以て妥当するような意味を厳密に解明することである。世界が存在するということが、世界が絶えず普遍的一致へ向けて調和する連続的経験において存在する宇宙として与えられて

いるということは、全く疑う余地がない。この生と実証科学を支えている不可疑性を理解しその不可疑性の正当性の根拠を解明することは、一つの全く別の事である。こうした点で、『イデーニ I』のテキストにおける詳述に従えば、次のような事は、一つの哲学的に基本的な事である。つまり、普遍的一致というこの形式での経験の連続的進行は、たとえ正当に妥当するものであるにせよ一つの単なる仮定であるということであり、それによると、世界はこれまでそして今も現実的に一致して経験されるものであるけれども、世界の非存在は依然として絶えず考えられうるということである。実在的世界および考えられうる実在的世界一般のあり方の現象学的意味解明の成果は、超越論的主観性のみが絶対的存在という存在意味をもつということであり、実在的世界は確かに存在するが超越論的主観性の志向的意味形成体としてのみ存在するものとしてその意味をもちうるので超越論的主観性への或る本質的相関性をもつものに対して超越論的主観性のみが〈非相関的〉である（すなわち、自己自身に対してのみ相関的である）ということである」(1)。

ここで、フッサールは、意識や主観を超えた独立の実在を認めて何らかの意味でそれとかかわることによって認識や世界が成立すると説く実在論と、物質ではなく観念的なものとしての意識を根本的本質とすることによって認識や世界が成立すると説く観念論との伝統的な闘争を踏まえ、自己の立場を両者から区別して超越論的現象学的観念論と称し、超越論的現象学的観念論が実在的世界の現実的存在を否定するものではないことを説いている。つまり、フッサールの超越論的現象学的観念論は、実在論のように意識を超えた独立の実在を認めるわけでもなければ観念論のように意識を根本的本質とするわけでもなく、実在的世界と意識の結び付きの超越論的現象学的本質の解明をめざすものである。

この『イデーニ I』(1913年)の「あとがき」の原文は、初めは『哲学および現象学的研究年報』第11巻(1930年)——『哲学および現象学的研究年報』は、フッサールとその弟子たちを中心とする現象学派の学術機関誌であり、その第1巻(1913年)においてフッサールの『イデーニ I』が掲載され、第11巻(1930年)まで継続された。——において公表され、『イデーニ I』の英語版(1931年、W・R・ギブソンの翻訳)に掲載されたのだが、この「あとがき」におけるフッサールの超越論的現象学的観念論の立場は、『イデーニ I』が公刊された1913年時点においても基本的に同じであった、と思われる。ただし、1913年時

点のフッサールは、自己の超越論的現象学的観念論の内実の展開について初めから確固たる構想をもっていた、とは言えない。なぜなら、フッサールは、『イデーⅠ』においては超越論的現象学に関して世間一般に対して啓蒙的ないわば教科書的な体系的叙述を行っているのに対して、『イデーⅡ』（1912年から1918年へかけて執筆された草稿）においては「自然と精神」という実在を主題とする实在論的傾向を帯びた叙述へと「实在論的転回」を遂げるからである（2）。

『イデーⅡ』の实在論的傾向を帯びた叙述を例証するものとして、『イデーⅡ』の或る箇所をここに引用しておこう。「我々は、〈自然的側面 [Naturseite]〉としての精神の〈基底 [Untergrund]〉を統覚することによって、我々が相互に区別する二つの態度つまり自然主義的態度と人格主義的態度あるいは自然科学的態度と精神科学的態度、そしてそれと相関的に实在の二つの種類つまり自然と精神が相互に関係するようになるような或る立場へ我々は至る。……体験流が諸作用を自己から湧き出させる（すなわち、自我がその他の体験流に基づいて諸作用を遂行する）かぎり、精神的諸作用における精神は心に依拠している。精神的自我は心に依拠しており、心は身体に依拠している。それゆえ、精神は、自然に制約されている」（3）。このように、『イデーⅡ』における叙述においては、物、身体、心、精神といった实在が現象学的に主題化され、实在論的傾向を帯びることになる。

そうした「フッサールの实在論的転回」の背景には、フッサールとその弟子たちとの間の仮借ない批判的な議論があった。その事について、本論は、次節で明らかにしなければならない。

## （2）フッサールの観念論的傾向に対する弟子たちの異議

インガルデンは、「エドムント・フッサールの私の思い出」（4）の中で次のように述べている。

「1913年夏学期における講義は、〈自然と精神〉という題目であった。フッサール・アルヒーフ（フッサール文庫）で、私は、この講義の基礎として役立つテキストを含んでいるはずの或る草稿の束を見せてもらった。ところで、表題紙には、〈イデーⅡ、1－305頁〉とある。その草稿のうちには、シュタイン嬢にもまた基礎として役立つ1915年の改作も含まれているということである（分類番

号FⅢ1)。さらに、その草稿のうちには、他の草稿も組み込まれているということであり、第六論理学研究の新編のための資料もまた含まれているということである。しかし、重要な事は、この講義が『イデーⅡ』の問題を扱っていたということであり、しかも、この事は、エディト・シュタインののちの仕上げから明らかになることだが、要するに或る強い实在論的外見 [ein starke realistische Anstrich] を保持した精神において『イデーⅡ』の問題を扱っていたということである。この事実は、1913年に公刊された『イデーⅠ』のテキストが含んでいた多くの考察がフッサールの弟子たちに対して或る種の驚きを与えたということがどのようにして起こりえたのかを明らかにする」(5)。

ここでインガルデンが述べているように、フッサールの1913年夏学期講義の題目は、「自然と精神」であった。そして、それは、1912年から1918年へかけてフッサールによって執筆されフッサールの死後出版されることになった『イデーⅡ』の主題と重なるものであった。エディト・シュタインは、1916年秋から1918年へかけて2年足らずの間フッサールの助手を務め、『イデーⅡ』の草稿をまとめあげることに尽力したのだった。しかし、ここで何よりも重要な事は、インガルデン自身も強調しているとおり、「自然と精神」という主題を扱うフッサールが「实在論的傾向」を呈していたということである。そして、その背景には、インガルデンが指摘するように、1913年公刊の『イデーⅠ』の内容がフッサールの弟子たちに歓迎されなかったということがある。そうした事情に関連して、インガルデンは、さらに次のように述べている。

『イデーⅠ』が公刊されたとき、フッサールは、それをゼミナールにおける基本テキストにした。我々は、それを家で読み、それから個々の節を討論したが、その際に、フッサールは、さしあたりさまざまな理解困難な箇所に関してフッサールに対してなされた質問に答えただけでなく、多くの補足的分析をも成し遂げ、いわばテキストの背後に隠されていた諸問題への広範な展望を頻繁に切り開いた。まもなく、活発な議論が展開された。それというのも、フッサールの何人かの古くからの弟子たちが、『イデーⅠ』において暗示された観念論的傾向 [idealistische Tendenzen] に対して、ならびに、超越論的還元の意味および成果に関して、さまざまな異議を唱えたからである。実際に、『イデーⅠ』における一連の主張は、フッサールのゲッチンゲンの弟子たちのサークルに対して或る種の驚きを与えたので

あり、ゼミナールの個々のメンバーとフッサールとの活気に満ちたいくつかの意見交換があった。何よりもまず、フッサールは、彼の詳論の正当な意味を明確化し、一連の問題において彼の立場を弁護することにも努めた。『論理学研究』(6)もフッサールの講義も、そう言ってもよいとすれば、実在論的口調 [realistischer Ton] を帯びていた (〈自然と精神〉と題された1913年夏学期講義もそうであった)。アドルフ・ライナッハの講義や演習もまた、同じ方向で行われた。それには、とりわけ、ジャン・エラン、アレクサンドル・コワレ (以前にはコンラート＝マルティウス夫人も)、アレクサンダー・ローゼンブルム、エディット・シュタイン、ルドルフ・クレメンス、そしてハンス・リップスが参加した。1913/14年のフッサールのゼミナールにおける議論が進むにつれて、フッサールの立場と彼のゲッチンゲンの弟子たちとの間の差異が、ますます強く暗示され始めた(7)。

ここでインガルデンが証言しているように、さらに一層明確になった事は、1913年に公刊された『イデー I』におけるフッサールの観念論的傾向に対して、フッサールの弟子たちはさまざまな異議を唱え、また、それに対してフッサールは自己弁護しつつ実在論的傾向を帯びた、ということである。そして、そうしたフッサールに対して、フッサールの信頼の厚い弟子の一人であり共同研究者であったライナッハもまたその講義や演習で実在論的方向へ進み、多くのフッサールの弟子たちもライナッハに同調した、ということである。

### (3) ジャン・エランの本質研究

前述のように実在論的方向へ進んだアドルフ・ライナッハの講義や演習に参加したフッサールの弟子たちの一人であるジャン・エラン(8)の「本質、本質性および理念についての所見 [Bemerkungen über das Wesen, die Wesenheit und die Idee]」(9)という論文は、『イデー I』におけるフッサールの観念論的傾向に対して異議を唱えた弟子たちの実在論的立場と、それに対して自己弁護しつつ実在論的傾向を帯びていくフッサールの立場との絡み合いの事態の核心を、如実に物語ってくれるように思われる。エランのこの論文は、『哲学および現象学的研究年報』第4巻(1921年)において公刊されたが、基本的には1913年に覚え書きとして成立しており、部分的にフッサールとライナッハのゲッチンゲンでの哲学演習に

おける議論へ遡る。しかも、フッサールを中心とする現象学派の当時の見方の修正を促しうるような新たな議論や考察は、それ以降も認められなかった(10)。それゆえ、エランのこの論文は、フッサールおよびライナッハの演習に参加したエランが演習の中で繰り広げられた議論を踏まえて成立した覚え書きに基づいており、しかもその内容がフッサールを含めた現象学派の人々に妥当なものとして受容されたという意味で、フッサールの実在論的傾向およびフッサールの弟子たちの実在論的立場の具体的内実を見極める重要な資料となるものと言える。

エランは、「本質、本質性および理念についての所見」という論文において、「個体としての本質 [das Wesen als Individuum]」(11) に関して次のように述べている。

「我々は、今や、しかし、例えば a の本質 [Wesen] の現存する理念 [Idee] について語っているのではなく、a そのものの本質について語っているのである。そして、a そのものの本質は、確かに a' の本質と全く同じでありうるが、しかし決して a' とは同一のものとして一致しうるのではない。なぜなら、この事物における赤の契機はこの赤の個別性 [Individualität] を廃棄するような理念のうちに措定されうるという事実と同じではなく、a がもつ或る〈本質 [Wesen]〉という語が、あるいは、〈一切の a の本質〉という語が、我々がここで a の本質つまりこの個別的な a の個々の本質 [das einzelne Wesen dieses individuellen a] と呼んだものを前提するものと言えるのと同様に、理念は、むしろ a の本質つまりこの個別的な a の個々の本質を前提するからである」(12)。

ここで、a という或る事物がもつ或る本質つまり一切の a という事物に共通の或る本質は、「この個別的な a という事物の個々の本質」であり、それを前提して初めて成立する理念 [Idee] とは区別されねばならない、ということが、説かれている。

「この個別的な a という事物の個々の本質」は、時間的空間的な経験的次元においてこのものと指示される個物における本質であり、エランの術語で言えば「個体としての本質」である。エランは、「個体としての本質」を「本質 [Wesen]」と呼び、超時間的空間的な超経験的次元における「理念 [Idee]」とは区別しているのである。

また、エランは、「主語となる個物 S の本質」と「S であるものつまり個物としての客観」に関して次のように述べている。

「Sの本質であるもの [was Wesen von S ist] とSであるもの [was S ist] との間の絡み合いは緊密であり、他の領域では容易にその類似物をもちえないということに、いずれにせよ我々は大いに気づく。Sの本質は、この本質の担い手である客観においてのみそして客観のうちにもみ観取されうる。Sの本質は、いわば客観のうちにもみあるのであり、もちろん客観から外へ出ることはない。だからまた、本質とその担い手との或る誤った同一視は、もっともなことである。他方で、SとSの本質は、何か異なる性質のものであるので、両者に割り当てられうるような述語は、ほとんど見いだされえないであろう。その事は、次のように言えよう。すなわち、例えば、本質の担い手が〈これ〉と指示されうる個別的なもの [ein τόδε τι] である場合本質は絶えず個体であるというかぎりにおいては、両者は同じ現存様式 [Existenzart] をもっている、ということである」(13)。

ここで、本質の担い手である客観が「これ」と指示されうる個物の場合、本質も個物も「個体」という同じ現存様式をもつ、ということが、説かれている。エランは、あくまでも「本質 [Wesen]」を「個体としての本質」として捉え、「時間的空間的な経験的次元における個物においては本質は絶えず個体である」ということを確認している。そして、そうした事を踏まえて、エランは、次のように言う。

「実在的可變的諸事物の本質 [das Wesen realer, veränderlicher Dinge] は、とりわけ啓発的である。なぜなら、実在的諸事物の本質の単なる現存 [Dasein] は、本質を無時間的不變的プラトンの〈理念〉つまり相変わらず思考すべき〈理念〉と同一視することを、きっぱりと排除するからである」(14)。ここで、エランは、「実在的可變的諸事物の本質」つまり「個体としての本質」はその現存 [Dasein] ゆえに無時間的不變的プラトンの理念とは次元が異なるものであることを、改めて明示している。したがって、エランの实在論的立場は、プラトンの理念を重視する観念論的立場とは異なり、時間的空間的な経験的次元における個物のうちに「個体としての本質」を洞察し重視するアリストテレス的経験論的立場を重視する点に根拠づけられている、と言える。

エランは、「本質 [Wesen(τὸ τί ἦν εἶναι)]」(15) とは対比的に、「本質性 [Wesenheit(εἶδος)]」(16) という術語を用いる。この本質性という術語は、アリストテレスの術語である形相 (エイδος) に相当する。エランは、本質性に関連して次のように述べている。

「この色を一つの赤にするものは、赤いものの可能性 [Rothaftigkeit] あるいは赤さ [Röte] あるいはそう言いたければ赤性 [Rotheit] と呼ばれる或る一定の或るもの性 [Washeit] である。この或るものの可能性 [Washaftigkeiten] は、対象の或るもの [Was] を成し、その所有が τί εἶναι (個体) という語に対して現象的基礎 [die phänomenale Grundlage] を与えるようなものである。対象の或るものの可能性に対する対象の関係は、何らかの対象の特性 [Eigenschaften] に対する対象の関係とは全く別のものである。或るもの性 [Washeit] は、対象におけるいかなる特徴 [Zug] でもなく、対象の本質を成すようなものであり、対象をそれが或るものであること [was es ist] にするようなものである。我々は、対象が或るものの可能性 [Washaftigkeit] なしにありうるようなことを考えることはできない。……そのうちで或るものの可能性 [Washaftigkeit] が対象に対してもつ固有の関係を指摘するためには、我々は、或るものの可能性 [Washaftigkeit] を、対象が或るものであること [was er ist] へと〈型取る [formen]〉μορφή [型式 (モルフェー)] としてもみなすだろう」(17)。

ここで、エランは、個体 (個物) が我々に対して現出する際の現象的基礎として、「或るものの可能性 [Washaftigkeit]」を提示している。それは、個物の現出に先立って個物の現出の可能性として個物の存在を型取る「モルフェー (型式)」である。

「或るもの性 [Washeit]」が対象の本質を成し、「或るものの可能性」が対象の現出の現象的基礎であるとするれば、本質 [Wesen] とモルフェーの関係は明らかにされたものの、本質性 [Wesenheit] とモルフェーの関係はどうなるのか。それに関して、エランは、次のように述べている。

「我々は、本質性が現実化されること [sich Realisieren der Wesenheit] という言い回しを暫定的な苦心の術語として保持するとき、我々は、本質性の現実化としてのモルフェー [die μορφή als ihre Realisation] について語りうるだろうし、本質性が現実化するものとしての対象 [der Gegenstand als ihre Realisator] について語りうるだろう (もちろん、本質性が現実化するものとしての対象とは、現実化をもたらすあるいは可能にする或るものという意味での対象ではなく、本質性が或るものの可能性 [Washaftigkeit] という形でそのうちで具現される [sich verkörpern] ような或るものという意味での対象である。)。対象を、我々は、モルフェーの担い手 [der Träger einer μορφή] とも言うだろう」(18)。



ここで、エランは、「本質性 [Wesenheit] ないしエイドス [εἶδος]」が「或るものの可能性」としての「モルフェー (型式)」を介して対象において現実化する (具現される)、と説いている。つまり、個体 (個物) としての対象の認識の成立を現象学的に見る際に、プラトンの天上のイデア (理念) の理想的次元に立つ観念論的立場から、イデア (理念) を地上へ引きずり降ろした形のアリストテレス的なエイドス (形相) の現実的次元に立つ実在論的立場への転換によって、エイドスがモルフェーを介して個体 (個物) としての対象の本質を指定するという実在論的な現象学的解釈が、存立しうるのである。そして、この点にこそ、「個体としての本質」を説くエランの本質研究の核心が存する、と言える。

#### (4) エランの本質研究に対するフッサールとその弟子たち

「個体としての本質」を説いたジャン・エランの実在論的な現象学的解釈に対して、フッサールとその弟子たちは、どのように対応したのだろうか。まず、エランの実在論的な現象学的解釈に対して、エディット・シュタイン (19) は、1917年2月3日付けのロマン・インガルデン (20) 宛の書簡の中で次のように述べている。

「エランのモルフェー [μορφαί] (属性 [ποιῖον] と個体 [τι]) は、おそらく具象における本質 [das Wesen in Konkretion] であろう (〈実在の本質 [reale Wesen]〉) と私は言うてはならないだろう。なぜなら、諸対象は、実在的なものに制限されはしないのだから。) し、対象をその対象が何であることを示すものにする。対応する純粋な本質性 [die entsprechenden reinen Wesenheiten] は、エイドス [εἶδος] であり、理念的対象 [idealer Gegenstand] であろう。属性 [ποιῖον] とエイドス [εἶδος] の差異は、一方で個体 [τι] と理念的対象の差異であり、他方で形式的存在論的差異つまり狭義の (対象) (命題論的領域において名目上の意味が対応するもの) と属性 (述語、規定あるいはあなたがそう命名しようとするさま) の差異であるように私には思われる」 (21)。

ここで、少なくとも、シュタインは、エランの言うモルフェーが「具象における本質」であることを認めている。つまり、シュタインは、エランの説く「個体としての本質」を容認している、と言える。そして、シュタインの書簡の宛先であるインガルデンもまた、すでに1916年にエランのこの論文の草稿を読んでいたので

あり、インガルデンののちの「本質の問題」という研究でもエランの研究に同意した(22)。さらに、フッサールは、1920年8月20日付けのインガルデン宛の書簡の中で、次のように述べている。

『哲学および現象学的研究年報』第4巻は、印刷中である。無意識および現代心理学についてのガイガー [Geiger] の重大な論文が出来上がった。印刷全紙9枚である。印刷全紙20枚になる予定のプフェンダー [Pfänder] の〈論理学〉の印刷が始まった。そのあと、エラン [Hering] の小論文(エイドス [Eidos] とモルフェー [Morphe])ということになる。そのあとまもなく、『哲学および現象学的研究年報』第6巻が、さらに印刷される(11月から)」(23)。

ここで、フッサールは、インガルデンに対して、結果的に1921年に公刊されることになる『哲学および現象学的研究年報』第4巻が1920年8月時点で印刷中であり、それに掲載されるものがガイガーとプフェンダーとエランの3編の論文であることを知らせている。そうすると、フッサールがエランの論文を妥当なものとして認めていることは、明白である。しかも、フッサールは、書簡中のエランの小論文に言及した箇所で、直後に括弧付きで「エイドスとモルフェー」と記している。その事は、フッサールがエランの論文「本質、本質性および理念についての所見」の核心を「エイドスとモルフェー」として把握していたことを明示している。つまり、フッサールは、おそらくこのエランの論文を草稿段階のかなり早い時期(1913年から1916年までの間のいずれかの時期)に読み、エランの説く「個体としての本質」に同意するとともに、強い啓発を受けたものと推察される。このエランの論文には、「エドムント・フッサールの60歳の誕生日(1919年4月8日)に捧ぐ」というエランの言葉が添えられているが、このエランの論文は、フッサールにとっては「会心の贈り物」であったにちがいない。

#### (5) フッサールの实在論的転回

これまで見てきたように、フッサールは、1913年以降、弟子たちとの仮借ない批判的議論によって啓発を受けながら「实在論的転回」を遂げた、と言える。本論は、その事をフッサール自身の言葉に基づいて検証することにしよう。フッサールは、1918年4月5日付けのロマン・インガルデン宛の書簡の中で、次のよう

に語っている。

「概して言えば、私は、『イデーニ I』（1913年）にずっと先立って、その当時、決定的洞察へ突き進んでいた。『プロレゴメナ』（『論理学研究』第1巻、1900年）の立場を、私は、とっくの昔に不適切なものと認め、あるいは、本質真理 [Wesenswahrheiten] に対してのみ正しいものと認め、本質真理と事実真理 [Tatsachenwahrheiten] との間の根本的差異の根拠を明らかにした。誤りは、何よりもまず、述語的な判断命題および意味の判断体験の場合に、〈意味〉と〈命題〉を本質としてあるいは本質 [Wesen]（スペチエス [Species]）という意味での〈理念 [Ideen]〉として捉える点にあった。一つの命題の意味が偶然的な判断および判断者から独立しているということは、理念的同一者 [das Ideal-Identische] が一つのスペチエス的なもの [ein Spezifisches] であるということをも意味しない。しかし、そこから、根源的時間意識へのその関係があなたに隠されたままになってはいないような最深の構成的問題 [die tiefste constitutive Probleme] への究極的解明が導く。しかし、私にとって今や、最深の構成的問題が、重要なのである。なぜなら、私は、単なる時間の現象学を研究しているのではなく、——時間の現象学は、純粹にそれ自体で切り離されえない。——個体化 [Individuation] という途方もない問題全体を、つまり個別的（それゆえ〈事實的 [tatsächlich]〉）存在一般の本質的な諸基本形態に応じた構成という途方もない問題全体を研究しているからなのである。それゆえ、今や、中心的ないしラディカルな現象学 [eine centrale oder radikale Phänomenologie] が、重要なのである」(24)。

ここで、フッサールは、『プロレゴメナ』（『論理学研究』第1巻、1900年）においては「本質真理」の次元つまりプラトンの観念論的次元に立っていたことを認めている。つまり、述語的な判断命題および意味の判断体験の場合に、意味と命題をプラトンのアイデア（理念）として捉えていたのである。しかし、認識客観としての意味と命題が超時間的空間的なものつまり普遍的必然的で理想的なアイデア（理念）であるとするれば、それは、時間的空間的なものつまり個別的偶然的で経験的なものである認識作用としての判断作用が働く現場から乖離しており、それゆえ、個別的的事実的存在としての経験的現実的認識客観の成立（現出）の場の構造を明らかにする「事実真理」は、そこには見いだされない。フッサールが、引用箇所中で、「一つの命題の意味が偶然的な判断および判断者から独立しているということは、

理念的同一者が一つのスペチエス的なものであるということをまだ意味しない。」と言っているのは、そういう意味である。

したがって、「本質真理」の次元つまりプラトンの観念論的次元に立つことに限界を見極めたフッサールは、「事実真理」の次元つまりアリストテレス的な实在論的次元に立つことへと舵を切ったのである。そして、フッサールは、個別的事実的存在一般の本質的な諸基本形態に応じた構成という大問題つまり「個体化」（個体の現出）という大問題へと究極的に突き進み、1917年8月から9月へかけての夏期休暇中のベルナウでの草稿の中で「個体化」の問題について執筆し（25）、1918年2月から3月へかけての冬期休暇中のベルナウでの草稿の中でも「個体化」の問題について執筆する（26）ことになるのである。

フッサールは、引用箇所中で、「私は、『イデーⅠ』（1913年）にずっと先立って、その当時、決定的洞察へ突き進んでいた。……本質真理と事実真理との間の根本的差異の根拠を明らかにした。」と述べているが、本質真理と事実真理との間の根本的差異の根拠を明らかにしたのは、『イデーⅠ』（1913年）よりずっと以前であるとしても、フッサールが『イデーⅡ』（1912年から1918年へかけて執筆された草稿）において実際に「自然と精神」という实在を主題化する際に实在論的傾向を帯びていくようになるのは、1913年夏学期以降の弟子たちとの仮借ない批判的な議論に啓発されてのことだと考えるべきである。そして、とりわけ、そうした議論が結晶化したものと言えるエランの説く「個体としての本質」の啓発は、「フッサールの实在論的転回」にとってきわめて大きな意義をもつものと言える。

## 結語

以上のように、本論は、第一に、『イデーⅠ』（1913年）におけるフッサールの現象学的観念論は、『イデーⅡ』（1912年から1918年へかけて執筆された草稿）においては「自然と精神」という实在を主題とする实在論的傾向を帯びた叙述へと「实在論的転回」を遂げる、ということを目指した。

本論は、第二に、1913年に公刊された『イデーⅠ』におけるフッサールの観念論的傾向に対して、フッサールの弟子たちによってさまざまな異議が唱えられ、それに対してフッサールは自己弁護しつつ实在論的傾向を帯びた、ということを目指

摘した。

本論は、第三に、「個体としての本質」を説くジャン・エランの本質研究の核心は、エイドスがモルフェーを介して個体（個物）としての対象の本質を指定するという実在論的な現象学的解釈である、ということを示した。

本論は、第四に、フッサールとその弟子たち（エディット・シュタインとロマン・インガルデン）は、ジャン・エランの本質研究に同意し、とりわけフッサールはそれによって強い啓発を受けた、ということを示した。

本論は、第五に、フッサールが『イデーⅡ』（1912年から1918年へかけて執筆された草稿）において実際に「自然と精神」という実在を主題化する際に実在論的傾向を帯びていくようになるのは、1913年夏学期以降の弟子たちとの仮借ない批判的な議論に啓発されてのことであり、とりわけ、ジャン・エランの説く「個体としての本質」の啓発は、「フッサールの実在論的転回」にとってきわめて大きな意義をもつ、ということを示した。

---

#### 注

- (1) Edmund Husserl Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Drittes Buch. Husserliana. Bd. V, hrsg. v. M. Biemel, 1971, S. 152f..
- (2) フッサールは、1912年9月に『イデーⅠ』の鉛筆書き草稿を仕上げた直後に、1912年10月から12月へかけて『イデーⅡ』のための最初の鉛筆書き草稿を執筆した。そして、『イデーⅠ』は、1913年4月に公刊された。それゆえ、フッサールの「実在論的転回」は、『イデーⅡ』の執筆の過程で漸次的に行われることとなる。(Vgl. Husserl Chronik Denk- und Lebensweg Edmund Husserls. hrsg. v. Karl Schumann, Husserliana Dokumente Bd. I, 1977, (以下、Husserl Chronik. と略。), S. 172-173 u. S. 177.)
- (3) Edmund Husserl Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch. Husserliana. Bd. IV, hrsg. v. M. Biemel, 1952, S. 281.
- (4) Edmund Husserl Briefe an Roman Ingarden mit Erläuterungen und Erinnerungen an Husserl, hrsg. v. Roman Ingarden, Phaenomenologica Bd. 25, 1968, (以下、Briefe

- an Roman Ingarden. と略。), S. 106-135.
- (5) Ibid., S. 109.
- (6) フッサールは、1913年5月ないし6月頃、『論理学研究』(1900/01年)の改訂版の準備をしていた。(Vgl. Husserl Chronik. S. 178.)
- (7) Briefe an Roman Ingarden. S. 113.
- (8) ジャン・エランは、1890年9月12日にフランスのシュトラスブールに生まれ、1966年3月23日に亡くなった。ゲッチンゲンでのフッサールの弟子で、のちに、シュトラスブール大学のプロテスタント神学部の新約聖書担当教授となった。  
(Vgl. Edith Stein Briefe an Roman Ingarden 1917-1938, Edith Steins Werke Bd. X IV, Herder, 1991, S. 34 Anm. 15.)
- (9) Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung. Vierter Bd. hrsg. v. Edmund Husserl, Verlag von Max Niemeyer, 1921, S. 495-543.
- (10) Vgl. ibid., S. 495. Anm. 1.
- (11) Ibid., S. 497.
- (12) Ibid., S. 499.
- (13) Ibid., S. 502.
- (14) Ibid., S. 505.
- (15) Ibid., S. 496.
- (16) Ibid., S. 505.
- (17) Ibid., S. 509.
- (18) Ibid., S. 510 Anm. 2.
- (19) エディト・シュタイン (1891-1942) は、ポーランド出身のユダヤ人であり、1916年秋以降2年足らずの間フッサールの助手を務めた (Vgl. Briefe an Roman Ingarden. S. 120. )。
- (20) ロマン・インガルデン (1893-1970) は、ポーランドのクラーク出身であり、1912年冬から1914年夏までの4学期間と、それからまた1915年夏に、フッサールの哲学ゼミナールの一員であった (Vgl. Briefe an Roman Ingarden. S. 3. )。
- (21) Edith Stein Briefe an Roman Ingarden 1917-1938, Edith Steins Werke Bd. XIV. Herder, 1991, S. 37.
- (22) Vgl. ibid., S. 37 Anm. 3.

(23) Briefe an Roman Ingarden. S. 15.

(24) Ibid., . S. 10.

(25) Vgl. Husserl Chronik. S. 216.

(26) Vgl. ibid., S. 221.

【追記】本論は、平成22年度科学研究費補助金基盤研究（C）の成果である。

(ほり・えいぞう・大分工業高等専門学校一般科文系教授)